

**令和元年度秋田県総合政策審議会
第1回農林水産部会 議事要旨**

- 1 日時 令和元年5月16日(木) 午後3時30分～午後5時
- 2 場所 総合庁舎6階605会議室
- 3 出席者

【農林水産部会委員】

今野克久 (有限会社今野農園代表取締役)
佐々木 昭 (前秋田県漁業士会会長)
佐藤 総栄 (有限会社秋田グリーンサービス代表取締役)
舘岡美果子 (果夢園代表)

【県】

小野正則 (農林水産部次長)
高野尚紀 (農林水産部参事(兼)農山村振興課長)
齋藤正和 (農林水産部農林政策課長)
柴田 靖 (農林水産部農業経済課長)
藤村幸司朗 (農林水産部農業経済課販売戦略室長)
本藤昌泰 (農林水産部水田総合利用課長)
安藤鷹乙 (農林水産部園芸振興課長)
畠山英男 (農林水産部畜産振興課長)
舛谷雅広 (農林水産部農地整備課長)
阿部喜孝 (農林水産部水産漁港課長)
石山正喜 (農林水産部全国豊かな海づくり大会推進室長)
齋藤俊明 (農林水産部林業木材産業課長)
鈴木光宏 (農林水産部森林整備課長)
土門久仁子 (観光文化スポーツ部秋田うまいもの販売課)

【事務局】

秋田県農林水産部農林政策課

4 農林水産部次長あいさつ

◎小野次長

委員の皆様においては、出席いただき感謝申し上げます。

今年は第3期ふるさと秋田元気創造プランの2年目であり、昨年皆様からいただいた提言を踏まえ、新規事業や事業の拡充により、施策目標に向けて取り組んでいる。

これまでの取組を振り返ると、農業に関しては複合型生産構造への転換を進めた結果、日本一を目指すえだまめやねぎが順調に拡大しているほか、しいたけも三冠王獲得にあと一步となっている。また、農業産出額も引き続き高い伸びを示している。

林業については、4月から森林環境税を用いた新たな森林経営管理制度が始まり、各市町村における体制整備を進めているほか、水産業については、今年9月に開催する全国豊かな海づくり大会を契機に、漁業、漁村の発展につなげていく。

一方、TPP11等の発効により、輸入の増加や産地間競争の激化、価格の低下等が懸念される状況であることに加え、県人口の減少が進む中、農林水産分野においても、労働力不足が顕在化している。

県では、構造改革の流れを加速し、米依存からの脱却を確かなものにできるよう取組を強化するとともに、先端技術を活用した次世代型農林水産業の発展を図るなど、労働生産性の向上に向けて取り組んでいるが、情勢変化やニーズにスピーディかつフレキシブルに対応していく必要があると考えている。委員の皆様には、幅広い視点から議論いただき、提言をお願いする。

5 部会長あいさつ

◎今野部会長

今年もよろしく願います。

昨年春に15haほど面積が増え、全部で43haの経営となった。機械は増やさず、従業員を一人増やして対応したところ、難しい気象条件の中で、これまでにない利益となり、規模拡大のメリットを実感した年となった。その分、自分自身の労働時間も増えており、働き方改革の観点から、新たな機械や技術でどう補填するかが課題となる。

人口増加は難しいと皆さん薄々感じていて、移住者をとと思うが、そうした方も子供を3人以上産む方はなかなかいないような状況である。

農業に魅力を感じて参画してくる従業員についても、結婚して子供を2、3人育て、大学を出し、家を建てという生活ができるくらいの給料を払えるのか、といったところまで考えないと、新規就農や農業の発展は考えられないのではないかと。

そういったところも含め、今日を入れて3回、いろんな話があればありがたい。

6 議事要旨

◎今野部会長

それでは次第に沿って進めさせていただくが、その前に一言申し添えたい。審議内容は議事録としてホームページに掲載される。その際には、委員名は特に秘匿する必要が無いと思うので、公開としたい。

それでは議事（1）について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料1により説明～

◎今野部会長

ただいまの事務局の説明について、意見・質問はあるか。

～意見無し～

◎今野部会長

では、次に議事（2）、農林水産戦略の推進に関する意見交換に入りたい。意見交換を行う前に、当部会で所掌する農林水産戦略の各施策に対する取組について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料2、資料3により説明～

◎今野部会長

事務局から説明のあった今年度の取組内容を踏まえ、資料3にある議論の主なポイントの中から、委員の皆様から2、3点について意見をいただきたい。担い手や世代交代、労働力の確保等、人材の部分が共通すると思うので、まずその辺りの話をしながら、林業や水産業といった各業種の話に触れてもらいたい。

◎佐藤委員

多様な担い手の確保・育成の観点からであるが、当社には特に募集しなくても入社してくる状況であり、これは、秋田市に人口が集中して都市型になってきていることにもよると思っている。特に30代以上の方々は、ライフスタイルとして林業を選んでいる。移住者でも、秋田に戻って、そうしたライフスタイルで生きたいと考え、仕事を選んでいるのではないか。

ライフスタイルがセールスポイントの一つになると思うが、住むところも含めてのセールスなのではないか。例えば、自然派の人たちは、マンションではなく、田舎で広々と住みたいという考えだと思う。そこで問題になるのが、秋田市では都市計画上、

農家以外では市街化調整区域以外に家を建てられないことである。県が高質な田舎と推している中で、市はコンパクトシティという、少し反対方向になっているところがあり、規制を緩和して、住むところもパッケージにすれば、移住やAターンで来る人が増えるのではないか。

秋田県の良いところのポテンシャルを生かせないのは良くないと思う。

それに関連して、ウッドファーストあきた木材利用ポイント事業に昨年申し込んだが、予算不足で却下された。利用したい人もいると思っている。予算を確保し、秋田に家を建てたい人の意志をくみ取っていけば、定住や移住にもつながるのではないか。

◎今野部会長

従業員は、秋田県出身の人が多いのか。

◎佐藤委員

秋田県出身の人もいるが、茨城などから来る人もいる。

奥さんの実家が秋田というケースもある。

◎今野部会長

今日、あきた未来創造部長から移住者数の報告があったほか、農林水産部長からも新規就農者数の話があった。数値は全部バラバラか。重複しているのか。

□農林政策課長

調査のやり方が異なり、全てを網羅している訳ではない。

農林水産業では、毎年10人強の移住者がいるが、あきた未来創造部では登録制度になっており、移住者の中には登録していない人もいる。

◎今野部会長

単純合計でもないのか。

□農林政策課長

そういうものでもない。現在は、あきた未来創造部の方に情報を集約するため、移住する方々には登録をお願いしている。

◎今野部会長

移住後はどのようにしているのか。

□農林政策課長

なかなか馴染めないこともあるので、移住者同士が話をする会を作るなどして、できるだけ馴染んでいけるようにしている。農業の方々もほぼ定着している。奥さんの関係で秋田に来たという方が結構多い。

◎今野部会長

三種町に移住し町議会議員選挙にも出るなど、地元の中で一生懸命活動していこうという方もいる。

その方は、三種町の支援が充実していたので移住したと話しており、新規就農のお金（農業次世代投資資金）を受給していた。制度を活用する人は多いが、その後生活を成立させていくのは難しいところがある。町議会議員などを兼ねれば、それはそれで生活が成り立つのではないか。

◎館岡委員

我が家で2年半くらい農業の研修をしていた方が、我が家の畑60aを中間管理機構を通して借り受け自立している。農機具はまるごと支援制度を活用し、5月中に草刈り機と格納庫、運搬車を整備した。来年度にはスピードスプレヤーも整備する予定である。就農場所の選定に当たっては、他の果樹園にも行き話をしたが、いいものを植えているところでは土地代や売上に比例した小作料が問題になり、逆に金銭面での条件が良くてもほ場条件が悪かったなど、果樹は難しい。

その方は、秋田市出身で、一時は東京にいたが、潟上市に移り住んで、給付金も受給しながら、腰を据えて取り組んでいる。研修中は指示を受けてやっていたものが、自分で全部考えてやらなければいけない。同じ時期ぐらいに研修に来ていた方々などと、もっと交流していけば楽しく取り組むことができるのではないかと思う。

◎今野部会長

ほ場があり、研修先が近いというのは、新規就農としては最高の条件である。

◎館岡委員

軍手一つ持たずに秋田に来て、農業ができるというのはすごいことだと思う。

◎今野部会長

ご自身の経営としては、売上が減ることになるが。

◎館岡委員

その分、残った面積をしっかりと取り組むし、去年、一昨年と、休園になる樹園地を買っていたので、そこに新たに苗木を植えようかと思っている。

◎今野部会長

稲作ではそういう話は聞かない。新規就農で稲作をやると初期投資が必要なので、同様のことができればハードルが少し下がる。お金を返していける経営が前提だが。

果樹で60aとなると、どれくらいの売上になるのか。

◎館岡委員

頑張って一人で売れば、10 a 当たり 30~40 万円になる。

◎今野部会長

60 a だと 240 万円くらい。

◎館岡委員

そこから経費が引かれる。

そのほかにも、我が家の果樹園の隣の土地を購入し、そこにリンゴを植えている。

本当に一人でやるとなると、頑張っても 70 a 位だろうと思う。例えば結婚して、奥さんが少しでも手伝ってくれたり、本人の家族や兄弟が手伝いに来てくれるのであれば、やれる面積はもっと増える。

◎今野部会長

農作業は、トラブルがあると人海戦術になる。そういったときに、年齢の壁は大きいと思っていて、新規就農の上限はどこにあるのか考えたことがあった。

◎佐々木委員

漁業の場合、新たな担い手はほとんどいない。地域内に私と同年代の人が 13 人いるが、漁師になったのは 3 人だけで、さらにその子供はほとんど継いでいない。我々の年代から、ガクンと漁師になる人がいなくなっている。

◎今野部会長

獲る人がいなくなれば、それだけ自分の収穫量が増えるものでもないのか。

◎佐々木委員

海は農業や林業のように自分の場所がないので、人が増えると困る側面もある。

以前は自由操業で海を自由に使っており、漁業者が多かったのではないかと。

今でも、漁獲量を規制してやっと成り立っているような感じだから、まだまだ人が多いのではないかと。昔だと、1 人当たり 100 万円ほど獲っていれば済んでいたものが、今だと 1 千万を超える漁獲がないと商売にならない。周りの収入が高くなって、それと同じ暮らしをすると、魚をある程度多く獲らないといけませんが、工場のように、機械が倍になれば収穫が倍になるものでもない。

また、例えば象潟の根魚のメバルを獲っているが、2 艘で獲ると、2 ヶ月くらいでいなくなってしまう。昔に比べて獲るのが上手になった分、その再生産が大変である。

タイのように回遊していく魚は、今、大謀網漁で獲っているように獲れるが、カキやアワビ、ナマコなど、そこにいるものは、数人いれば獲りつくしてしまうほど、みんな上手になった。サケのように回遊する魚を獲っていけないと大変である。

◎今野部会長

ハタハタも同じような状況か。

◎佐々木委員

ハタハタは、沖の 300m以下の水深のところから、産卵のために沿岸に戻ってくる魚であるので、ちょっと獲ればいなくなってしまう。タラなども、普段は深海の 200～300mの深いところにいるもので、青森などでは、冬に産卵のために 50m位のところに来たのを獲っている。

地魚だと数人で獲ってしまい、なかなか増えないという課題があるので、大間のマグロのように、次々と回遊してくる魚を獲らないと商売にならないのではないか。

また、飛島の方では、以前はウスメバルを 20 艘くらいで獲っていたが、20 年くらい前から、レジャー船が増えてしまって商売にならなくなり、飛島のさらに沖、佐渡の沖まで行かないとダメになった。このように、地魚は増える要素がなかなかない。

◎今野部会長

北秋田市の藤岡農産の社長も、人口が減れば経営面積が増えると言っており、そうしたものの見方もある。

ただ、大潟村では、土地の値段が高いこともあるが、ある程度以上の面積の拡大は地域のコミュニティが壊れる恐れがあるのでやめて欲しいと言っており、バランス良くやっていくしかないと思う。

でも獲り方が上手くなったから漁師の数が減ってもいいとなると悩むと思うが。

◎佐々木委員

理由は分からないが、その割に水揚げが上がっていない現状がある。

また、冷凍技術が発達しており、漁業は外国と競争しなければいけない分野である。

◎今野部会長

担い手確保については、佐藤委員のところは十分のように見えるが。

◎佐藤委員

関連する県の施策で、林業大学校を設置していただいて今年で 5 年目になるが、卒業生に対して、林業大学校での研修が良かったと感じているか、就業後にアンケート等で調査しているか。

□森林整備課長

卒業生には年 1 回、林業研究研修センターの職員が訪問して、その後の状況を聞くなどしているが、今年はそのあたりを重点的に聞いてみたい。

◎佐藤委員

林業大学校に行かないで就職した場合と比べ、どちらが良いのかと考えている。研修は、非常に意味のあるものでなければ、時間的にもったいない。資格取得など勉強にはなるが、技術校という扱いの中で、そのまま現場に送り出すところまで謳うことができるのか。そこまで踏み込んだ教え方をしなければ、採用した会社からすれば期待外れになる。林大の卒業生を雇用しているが、やはりもっと実践に則したところまで研修すべきではないかと思う。研修カリキュラムも、教室での座学はともかく、実務を手取り足取り教えていく体制が必要である。インターンシップに丸投げではなく、やり方を考えるべきと感じる。

◎今野部会長

どのくらいのレベルになることを想定しているのか。

◎佐藤委員

林業大学校に行かずに就職し、普通に働いて2年経った職員と同じくらいのレベルになってたらいと思う。我々は職人なので、5年、10年やって一人前である。2年では全く足りないが、せめてそのレベルと同じくらいになって、さらに、それ以上の知識を持って来てくれれば良いと思っている。

◎今野部会長

稲作でもインターンシップのような話があったが、研修先での目標や、研修終了時の卒業式や到達確認もないので、家の仕事を手伝ってもらって終わってしまったというケースもある。そういう意味では、確かに効果測定は難しい。

◎佐藤委員

農業だと資格がなくてもできる作業があるが、林業の場合は、基本的に資格が必要なほか、危険な作業もある。だから、インターンシップで一からその人を教育し直すことになり、徹底的にたたき上げていく。資格不用な産業はいいが、資格で固められた産業なので、難しいところがある。

◎今野部会長

人がいない現場からすれば、うらやましい限りではある。

◎佐藤委員

人が少なくなり、林業でも、自社が抱える地域が増えている。我々も、森吉から西仙北町土川までの範囲に現場がある。その区域の人が足りず、手伝いに行っているようなもので、8班体制で毎日動かしている。人がいると言っても、小さな団体がいくつかあるようなもので、まだ足りない。

今後、更に人が不足すると思うので、VR等、インターネットを介して会社の中から機械を遠隔操作する時代になるかもしれない。

人がいなくなることも深刻なのが、結婚しなくて良いとか子供がいらないと言っている人たちの価値観で、増やそうとしないことが問題と思う。生活様式の変化で価値観が変わったのだろうか。

林業は危険な産業であり、比較的に子供が多い方と思うが、その中でもそういう価値観の人が出てきている。

給料は結構払っているが、稼いでいるから子供が多いという訳でもない。その辺の価値観が一番危ないところではないか。

◎今野部会長

館岡委員から、加工や直売など女性の活躍推進について意見ををお願いしたい。

◎館岡委員

加工等に新規参入しようと思えるということは、農作業の人手が足りているからで、作業で手一杯になっていると難しい。むしろ、面積が狭く付加価値を付けようという人は良いと思う。

一方で、先輩たちの漬物加工などを見ると、その世代で終わりそうに見える。残していきたいと思うのであれば、後継者に引き継ぎ、教えていかなければいけない。

◎今野部会長

大潟村でも、お母さん方が出資して加工場を運営しているが、コンビニとの競争などで大変な上、高齢化が進んでいる。若い方が入る訳でもなく、集落営農の法人の高齢化と大して変わらない。

◎館岡委員

農協婦人部でも新しい人が入りにくいと聞く。

法人化して、協力して農業をすればするほど、奥さんたちの仕事が不足するし、奥さんたちも農作業をしたことがないなどで、結局働きに出ていく。法人も高齢化しているので、とりわけ40代が増えていかないといけない。また、大規模経営の方が亡くなったりすると、その穴埋めが必要になるが、新たな機械が必要になるなど難しい。

◎今野部会長

八郎潟町のファーム夢未来では、域外からの従業員が社長になると聞いている。事業継承が成功した例だが、そういうところはまだ少ない。

◎館岡委員

果樹では、生産を継続できないと判断すると、ちゃんと管理している人ほど周りに迷惑を掛けないように木を切ってしまう。新植すると無収入の時期があるので、誰かが辞めるときに、新たに引き継いでいけるような仕組みがあれば良い。

◎今野部会長

新規就農の方は、有機栽培の薬物栽培から始まり、宅配などに取り組む人が多い。全国的には久松農園など有名な方はいるが、そのような人は秋田にはほとんどいない。新規就農者をどうフォローしていけば軌道に乗せてあげられるのかと思う。

秋田市内では似たようなものを同じ時期に売るので多くは売れず、有機栽培に向かうと逆に量があまり取れない。

新規就農者の確保には、どのくらいの情報を発信し、人を呼び込んでいくかということになり、最後は農山漁村の活性化の話になる

漁業では、インバウンドや外国人労働者の話はあるか。

◎佐々木委員

インバウンドは全く無い。県内にもいるのかわからない。外国人労働者についても、縫製工場などでは見かけるが、漁業は聞いたことがない。

秋田県には水産加工場もほとんどない。漁業者は漁で手一杯で、加工までは難しい。横浜などの大規模な港だと、漁業者が大々的に水産加工をやっている事例があるが秋田にはない。

直売については、漁業組合でやったことがあったが、うまくいかなかった。相当やる気がないと直売所でも利益が出ない。成功事例は、商売として利益を出すという意気込みで取り組んだものであり、こうした直売所を見ると良いと思う。

◎今野部会長

結局は人に依る。人口が減るので、どのようにこの地域でみんなで稼いでいくかというのが、最大の課題だろうと思いつながら、それでもなかなか夢を語れない状況にいる。その中で、メガ団地はかなり順調に来ていると聞いている。

□農林政策課長

整備中も含めて、33団地となった。能代のメガ団地がねぎで1億円に到達するなど、順調なところが増えてきているが、まだ目標に達していない団地もあるので、そのフォローが大事だと思っている。そこでは労働力不足が問題になっている。

◎今野部会長

外国人労働者の状況はどうか。

□農林政策課長

農業関係では、大潟村の(有)正八や、能代の農家、峰浜のしいたけの3か所で外国人を受け入れている。今後増えるかもしれないが、県内の農業法人の状況としては、期待していて人材は欲しいものの、今すぐという感じではなく、様子見のところが多い。

□園芸振興課政策監

大野台グリーンファームでは、3月25日には3名が来る予定だったが、入国管理の方が混んでいるようでまだ来ていない。

◎今野部会長

個人的には、労働力を外国の方に依存して国内で生産するのと、農産物を輸入するのと、どっちなんだろうと考える。できる範囲での規模や工夫で、それなりの経営をやっていく道はないかと思う。

◎佐藤委員

当社では、外国人は一切使わないつもりでいる。

林業は、50～60年で1サイクルというスパンの長い仕事であり、長い目線で仕事をするために、なるべく地元で根ざした人、なるべく会社から近いところに住んでいる人たちを採用したい。

外国人を雇用するよりは、女性を採用していきたい。

◎今野部会長

ICTや先端技術については、どこまで楽になるのか、効率化できるのかということところが未知数である。省力化できるところとできないところがあり、生産性がどこまで上がるかというのはある程度確認しているが、それに見合うコストなのか。人の代わりになるには、まだ時間がかかるのではないか。

◎佐藤委員

情報管理のツールとしてあるが、それがハードと直結し実際の生産現場となると、技術的にはなかなか厳しいと思う。情報整理する、簡略化するためのツールとして使っているが、それ以上は難しいのではないか。

◎今野部会長

今、「みちびき」がもう何機か打ち上げられ、7機体制になって最大の性能と聞いているが、それでも1cm、2cmというレベルではない。期待しすぎた感じがする。一方で、やはり人を育てないといけないと思う。農業をやってくれる人間が残ってくれるよう、しっかりやっていかなければいけない。

◎佐藤委員

産業的なイニシアティブみたいなものを出していけるような体制づくりやバックアップ、ライフスタイルに訴えるものなどが必要である。

◎今野部会長

今度は、どうやってそういう人たちに声かけしていくか、ということになる。

◎佐藤委員

うちの会社は相当最先端の林業の中でもかなり先を行くことをやっている。それで人が集まってきているというところがあるかもしれない。1次産業は3次産業よりもよほど魅力的だと思うが、それをちゃんと出せていない。なにかエッセンスを持った人たちを掘り起こしできてないだけではないか。

◎今野部会長

今後は、ものを作るのも大事だが、仕事の魅力を仕事の中でどのように発信していくのか、仕事として取り組んでいかなければいけない。

◎佐藤委員

農業体験についても、増やしてもいいのではないか。

◎今野部会長

先週、村を窓口として、東京の中学生が修学旅行で大潟村に来たのを、農家の有志30戸くらいで2日間4人ずつ受け入れた。5年くらいやっているもので、都会に住んでいる子たちがぶらっとやってきて、1,000万円くらいの農業機械に乗せてあげると、楽しんで帰って行く。それが後々、思い出してくれて何かに協力してくれたりするかもしれない。こうしたことを含め、もっと開いた農村のようなものを提案していかなければいけない。

◎佐藤委員

そのあたりは、もっと行政の後押しが必要である。

◎今野部会長

漁業では、農業体験のようなものはあるのか。

◎佐々木委員

体験というわけではないが、1ヶ月くらいサケの定置網に20歳くらいの子を乗せたことがある。ごくまれにそういう人が来るが、なかなかうまくはいかない。

漁のやり方で仕事内容が全然違うので、いろいろなところで体験すれば良いのではないかと思う。全く違う内容だから、少しずつ回って、自分に合っているところに入っていければ良いのではないか。

◎今野部会長

林業も漁業も危険を伴うので、気軽に修学旅行生を受け入れることは難しいのか。

◎佐々木委員

仕事をしている状況を見るくらいなら大丈夫である。

◎佐藤委員

少し触れてみるくらいなら十分できる。とりあえず見れば、情報として頭の中に蓄積される。それだけでもいい。それすら情報としてオープンにしていなくていいところがある。実際の作業などを見れば違ってくるだろうと思う。

◎佐々木委員

農業高校の人が現場に見に来るなどということはないのか。

男鹿海洋高校からは、男鹿の方には行っているのかもしれないが、にかほ市などではあまり聞いたことがない。

◎今野部会長

農業そのものに関して来ると言うことは全然無い。

◎佐藤委員

高校生のインターンシップは来っていないのか。

◎今野部会長

金足農業高校では、大潟村の農家に、夏休みの間1週間くらい寝泊まりするなどしているようだ。

□農林政策課長

農業系の高校では、農業関係のインターンシップをやっている。県の普及事業の中でも、振興局の企画で、農業法人などに入ってもらい、夏休みなどにインターンシップとして収穫体験などをやっている。

◎佐藤委員

当社にも西仙北高校や大曲農業高校からインターンシップに来て、2回くらい来た後にそのままその土地で就職した方がいる。1人入ると、次からは先輩と後輩でつながっていく。

本当は、定期的に学校からつながって入ってきてくれるとありがたい。

◎今野部会長

高校の卒業式にまで顔を出すようでないで、人材確保はなかなか難しいようである。就職担当の先生と仲良くなっていくことも必要なようである。

◎佐々木委員

水産業の活性化、つくり育てる漁業について、サケ、この10年くらいは、秋サケ

がいくらか調子が良く、2ヶ月くらいだけだが、相当の水揚げがある。サケは、象潟の川袋川で、地元の集落でも放流している。20年くらい前、せっかく放流したのを漁師だけが沖で漁獲してしまうのはダメだと言うことで、現在は水揚げ金額の6～7%を徴収し、漁業組合が川袋川にふ化場をつくって、地元集落と同程度放流している。県の補助金も活用して放流しており、漁獲は良い状況にある。

サケ以外でも、良い種苗があればそれを活用し、収入の増加につなげていきたい。ヒラメやアワビ、サザエなども、水揚げの数パーセントを負担しながらでも放流していく必要があり、水産振興センターの栽培漁業施設が新しくなるので、期待しているところである。

北海道では、直まきで年収1～2千万円の方がいるようである。本県では、養殖できる環境がないので、少しでも放流して、所得向上につなげるべきである。